芸　　術

1　芸術科における授業改善等の成果と課題

学習指導要領では、各教科等の目標及び内容が、育成を目指す資質・能力の三つの柱「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に沿って再整理され、各教科等でどのような資質・能力の育成を目指すのかが明確化された。また、教師が「子どもたちにどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図るため、「指導と評価の一体化」の充実が求められている。（手引、令和３年度参照）

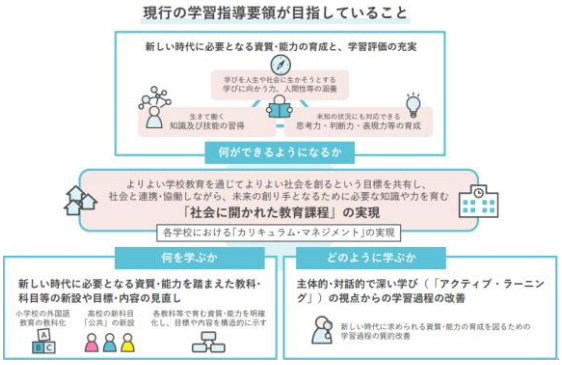


図１　初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について
（令和６年 12 月 25 日中央教育審議会諮問）

また、未来の社会を見据え、生徒の資質・能力を育成するに当たっては、学習指導要領の趣旨を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実を図るとともに、これまで培われてきた工夫とともに、ICT の新たな可能性を指導に生かすことで、「主体的・対話的で深い学び」の充実に向けた授業改善につなげることが重要である。

北海道教育委員会では、各教科等教育課程研究協議会や北海道高等学校教育課程研究協議会、学校訪問等を実施するとともに、各種研修会や、各管内における教科研修会等を通して、次のような教育課程実施上の成果と課題を把握した。

	成果	課題
全体	・現行の学習指導要領における「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」を学校単位で推進している学校が増加している。 ・各種研究協議会を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が図られている。 ・生徒が主体的に活動ができるよう、心理的安全性を担保した授業づくりが増えてきた。 ・授業における ICT 活用の取組が充実している学校が増加している。	・自分の考えをもち、根拠をもって明確に説明すること、自律的に学ぶ自信がある生徒の育成に難しさを感じている授業が見られる。 ・習得した知識を現実の事象と関連付けて理解し、概念としての知識の習得や深い意味理解をさせることに課題がある授業が見られる。 ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について、校内における教員間の認識の差がある。 ・生徒を主語にした授業の在り方について、校内で一層研鑽する必要性がある。
芸術科	各科目においては、次のように資質・能力の育成を意識した授業改善の取組が進んでいる。 ＜音楽＞ ・音楽を聴いて捉えた特徴について理解したり、音楽を形づくっている要素と関わらせて言葉で表したりすることなどに関する指導。 ＜美術、工芸＞ ・生徒が感性や想像力を働かせ、造形的な視点を豊かにもち、表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら、心豊かな生活などを創造しようとすることに関する指導。	各科目においては、次のような課題が見られる。 ＜音楽＞ ・根拠を明確にしながら思いや意図（表現意図）をもち、技能の習得や活用によって豊かな音楽表現の能力を身に付けるとともに、音や音楽の新たな価値を見いだしていくこと（表現）。 ・音楽表現の共通性や固有性などについて考えたことを根拠としながら、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと（鑑賞）。 ＜美術、工芸＞ ・結果としての作品のみに着目するのではなく、

	＜書道＞ ・生活や社会における書の目的や用途と表現効果や風趣との関わりについて考え、書を生活や社会の中でどのように生かすかを考えたり判断したりすることに関する指導。	発想や構想をしたり、意図に応じ創造的に表したりする過程を重視した指導への改善（表現）。 ・作品などの表現の意図や特徴、創造的な工夫などについて根拠をもって感じ取ったり考えたりできるようにすることへの改善（鑑賞）。 ＜書道＞ ・創作の指導において、自己との関わりを通して作品や書の伝統と文化の意味や価値を考えながら、表現の意図を自ら想起し創造的に構想・工夫すること（表現）。 ・古典や名筆、名品を鑑賞する機会の一層の充実や、鑑賞を通して身に付けた資質・能力を表現に関連付けること（表現、鑑賞）。

2　学習指導及び学習評価の改善・充実

学習評価は、「生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められる。

例えば、「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決するために、必要な「思考力、判断力、表現力等」を身に付けているかを評価するものである。「思考・判断・表現」の評価をするために、教師は、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善をする中で、生徒が思考・判断・表現する場面を効果的に設定するなどした上で、指導・評価することが求められる。

また、「思考・判断・表現」の過程には、

- 物事の中から問題を見いだし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程
- 精査した情報を基に自分の考えを形成し表現したり、目的や状況等に応じて互いの考えを伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程
- 思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程

があり、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、探究的な学習活動の中で、具体的な学習内容、単元や題材の構成や学習の場面等に応じた指導方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるようにすることが重要である。

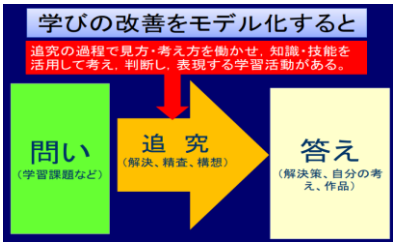


図２　新学習指導要領における思考力，判断力，表現力の評価について（平成 30 年７月９日教育課程部会児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ）

評価方法については、発表、グループでの話合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらをICT 等の活用によりポートフォリオにまとめて評価したりするなどの工夫が考えられる。

このことを踏まえて、芸術科においては、次のような学習指導及び学習評価の工夫が考えられる。

【学習指導（★）及び学習評価（☆）の工夫】

★知識を習得してから表現するという一方向ではなく、表現活動や鑑賞活動の中で必要な知識・技能を身に付けていく単元や題材の構想を重視

例）
表現・鑑賞の課題に取り組む
↓
必要な知識・技能に気付き、習得する
↓
試行錯誤しながら表現を改善する
↓
鑑賞を通して価値やよさを見いだし、さらに表現を深める
という往還的な学習過程を構想

★表現と鑑賞は密接に関係していることから、表現の学習が鑑賞に生かされることや、鑑賞の学習が表現に生かされることを通して、一層充実した創造活動に高まっていくよう工夫

例）
＜音楽＞
演奏を比較して鑑賞
→自分の演奏表現を改善する
＜美術・工芸＞
名画、名作の構図を分析
→自分の作品制作に生かす
＜書道＞
古典作品を鑑賞
→自分の臨書や創作へつなげる

★生徒自身が自分の学習過程を捉え直し、次の表現や鑑賞の学習へつなげるために、ICT 等を活用して、思考を可視化することで、振り返りなどの活動を充実

例）
＜音楽＞
録音・録画による演奏の振り返り
＜美術・工芸＞
生成 AI の画像分析による構想
＜書道＞
運筆動画の撮影、拡大提示による比較

【ワークシートの活用について】
複数の領域・分野を関連付けた題材においては、生徒が各領域・分野ごとの学習内容や学習成果等を整理できるようにし、学習内容のまとまりを把握できるように構成することが考えられる。
これによって生徒は、毎時間の記入時に、前時までの自らの学習状況と本時の学習状況とを比較しやすくなり、学習を通して自分の考え方や感じ方、捉え方などにどのような変化が見られるか、前時に課題として記録したことに対して本時はどのように取り組み、どのようにその課題を解決したか、また、新たな課題はどのようなことで、次の時間にどのように学習に取り組んだらよいかなど、自己の学習を調整しながら進めていくことを促すことにつながる。

☆演奏したり、作品を完成させたりするだけではなく、楽曲や作品をどのように考え、どのような表現意図をもったかを見取ることを重視

例）
・アイデアシート　・アイデアスケッチ
・ワークシート　・プレゼンテーション
・話し合い　など

☆生徒同士が「見せ合う」、「聴き合う」、「評価し合う」、「意見交換する」活動などを見取る機会を設定することで「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法を工夫

例）
・グループ講評会　・ギャラリートーク
・演奏交流　・相互評価　など

３　指導と評価の計画例

(1) 音楽Ⅰの計画例

ア　題材名

「THE NEXT TAKE」 ～ポピュラー音楽の歌唱をセルフ・プロデュースしよう！～

イ　内容のまとまり

「Ａ表現」(1)歌唱 及び〔共通事項〕(1)

「Ｂ鑑賞」(1)鑑賞 及び〔共通事項〕(1)

ウ　使用教材

生徒が自由選曲する J-POP 等の楽曲とアーティスト		
・優しいあの子	(スピッツ)	
・少年時代	(井上陽水)	
・君に届くまで	(Little Glee Monster)	
・翼をください	(赤い鳥)	
・僕のこと	(Mrs. GREEN APPLE)	
・上を向いて歩こう	(坂本九)	など

※本題材では、生徒が日常の生活や社会の中で慣れ親しんでいる J-POP 等を教材として取り扱うことで、学習に取り組む意欲を高める。また、キー変更（移調）機能を備えたアプリケーションや対話型生成 AI「AI ボーカルコーチ」（※以下「AI ボーカルコーチ」という。）を適宜活用することで、変声期等の発達段階や個々の声域の特性に応じた適切な学習環境を確保する。

エ　題材の目標

○　知識及び技能

曲想や表現上の効果と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解するとともに、創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な、曲にふさわしい発声、身体の使い方などの技能を身に付ける。

（「Ａ表現」(1)歌唱 イ(ｱ)、ウ(ｱ)、「Ｂ鑑賞」(1)鑑賞 イ(ｱ)及び〔共通事項〕(1)）

○　思考力、判断力、表現力等

構成を知覚し、その働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもつとともに、演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴く。

（「Ａ表現」(1)歌唱 ア、「Ｂ鑑賞」(1)ア(ｱ)及び〔共通事項〕(1)）

○　学びに向かう力、人間性等

楽曲の構造と発声技法や音色などの歌唱表現の工夫との関わりに関心をもち、主体的・協働的に歌唱や鑑賞の学習活動に取り組むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽を愛好する心情を養う。

オ　題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知① 曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解している。（歌唱） 技 創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な、曲にふさわしい発声、身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。（歌唱） 知② 曲想や表現上の効果と音楽の構造との関わりについて理解している。（鑑賞）	思① 構成を知覚し、その働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもっている。（歌唱） 思② 構成を知覚し、その働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴いている。（鑑賞）	態 楽曲の構造と発声技法や音色などの歌唱表現の工夫との関わりに関心をもち、主体的・協働的に歌唱や鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。（歌唱・鑑賞）

カ　指導と評価の計画（６時間）　　評価がＢとなる生徒の姿の例

時	学びの過程	○内容　・学習活動 （学習活動の概要、指導上の留意点）	評価の観点 知技	思	態
1	習得	○　音楽の構成と表現の効果を捉える。 ・アーティストの歌唱を鑑賞し、構成の変わり目で歌唱表現がどのように変化しているか、その効果を分析する。 ・歌いたい曲を選び、その曲の構成上の特徴をシートに整理する。 **音楽の構成と歌唱上の表現の変化を関連付け、構成と表現の効果の関わりについて理解し、おおむね妥当な内容で記入している。（ワークシート）**	知②		
2	活用	○　自らのイメージに基づいて表現意図を整理する。 ・実際に歌いながら、楽曲分析シートに、構成を際立たせるための表現の工夫（強弱や音色の変化など）を黒文字で書き込む。			
3	活用・探究	○　自身の歌唱を録音し（Take1）、客観的に振り返る。 ・録音した自身の歌唱を客観的に聴き、当初の表現意図（黒文字）がどの程度実現されているかを捉え直し課題を分析する。 **音楽の構成とそれを生かす場面に応じた表現（発声や音色の選択など）との関わりについて理解し、アイデアシート等におおむね妥当な内容を記述している。**	知①		
4 本時	活用・探究	○　グループの仲間や AI との対話を通して具体策の吟味し、表現意図の修正をする。 ・グループ内で Take1 の録音を聴き合い、課題点を整理する。 ・「AI ボーカルコーチ」を適宜活用し、改善策を検証する。 ・対話で出たアイデアや、必要に応じて AI ボーカルコーチから提示されたアプローチを、実際に歌いながら試して吟味し、納得した策を赤文字で加筆・修正する。 **楽曲の構成と歌唱上の表現の特徴を関連付け、自身の歌唱と理想のイメージとのズレについて考えるとともに、具体的な歌い方の工夫について、アイデアシート等におおむね妥当な内容で記述している。**		思①	
5	活用・探究	○　他者の視点を統合し、自身の歌唱を録音する（Take2）。 ・グループ内で黒文字・赤文字で加筆した楽譜を交流し、表現意図の多様性に触れる。 ・録音した歌唱について、相互に鑑賞・評価し合う。 **楽曲の構成の変化に応じた曲にふさわしい発声や身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。**	技		

6	活用	○　「プロデューサー」の視点で再鑑賞と批評を行う。 ・自らの試行錯誤を振り返り、アーティストの歌唱を再鑑賞する。 ・自分が苦労した音楽の構造と技能の関わりに着目して、アーティストの表現意図を捉え直し、演奏のよさや美しさについて根拠をもって楽曲レビューとしてまとめる。		思②	態

音楽の構成を知覚し、その働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、自らの歌唱体験を根拠として、演奏に対する評価とその理由について考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴き、楽曲レビューにおおむね妥当な内容を記述している。

音楽の構成や歌詞に関心をもちながら、歌唱と鑑賞の学習課題に対し粘り強く取り組んだり、自己の学習を調整したりするとともに、他者と関わりながら学習活動に取り組もうとしている。（観察、ワークシート）

キ　学習指導案（４時間目／６時間中）

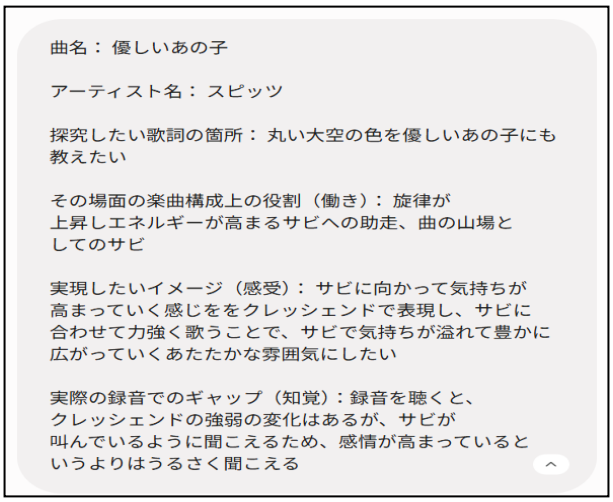
本時の目標：グループの仲間や対話型生成 AI との対話及び歌唱練習を通して、表したいイメージを具現化するための具体策の吟味と表現意図の修正を行う。

過程	○内容　・学習活動	●指導上の留意点　◆評価
導入 ５分	○　本時の学習の見通しをもつ。 ・前時に録音した Take1 を聴き直す。 ・第２時で自分が楽譜に書き込んだ当初の表現意図と、実際の自身の歌声にどのような差があるかを確認する。	●　単なるよさの判断に留まらず、音楽を形づくっている要素（強弱や音色など）が、当初の計画通りの表現上の効果をもたらしているかを比較させる。
展開 40 分	**問い：Take1 の歌声は、あなたが届けたい曲想や構成の働きを本当に表現できているだろうか？また、理想の歌声に近づけるために、どのような発声や息使いのアプローチが考えられるだろうか？**	
	○　グループ内で Take1 の録音を聴き合い、課題点を整理する。 ・お互いの意見も踏まえ、振り返りシートを用い、表現意図から特にかけ離れていた箇所を楽譜上に○で囲む。 ・その要因がどの要素の働きによって生まれているのかについて考える。	●　自由選曲のため楽曲が異なる場合でも、表面的な感想（「上手・下手」など）に終わらせず、音色や強弱、構成などの音楽を形づくっている要素と、発声や息使いなどの歌唱表現の工夫との関わりに着目してアドバイスし合えるよう、対話の視点を明示する。
	○　班の仲間との対話や AI ボーカルコーチを適宜活用し、表現のアプローチを検証・吟味する。 ・対話で出たアイデアや AI から提示されたアプローチを、実際に歌って試しながら検証する。（必要があれば生成 AI を活用し、フォーマットに【曲名】【課題と感じている部分】【実現したいイメージ】などを入力し、相談する。） ・自分の表現意図に最も適した解決策を選択し、楽譜上に「赤文字」で加筆・修正する。 ・採用した提案や、採用しなかった提案についても、音楽的根拠を添えてワークシートに記録する。	●　AI ボーカルコーチは、生徒が必要に応じて適宜使用することとし、班の仲間との対話や自らの試行のみであってもよい。また、生徒が AI からの助言をそのまま鵜呑みにしてしまうのを防ぐため、必ず実際に歌って試すことにより得た実感を基に、自らの判断で採用するかを決定させることを徹底する。 ●　楽譜への加筆（赤文字）だけでなく、班の仲間や AI からの提案を採用しなかった理由などについても、音楽的根拠を添えて記述させ、生徒がどのような根拠に基づいて解決策を選択したかを見取る。 ◆　思①＜ワークシート＞
まとめ ５分	○　本時の学習を振り返り、変容を自覚する。 ・本時の学習を通して、当初の表現意図からどのように変化したかを振り返りシートに記述する。	●　次時では、Next Take（再録音）を行い、グループで交流することを伝えた上で、振り返りシートを保存させる。

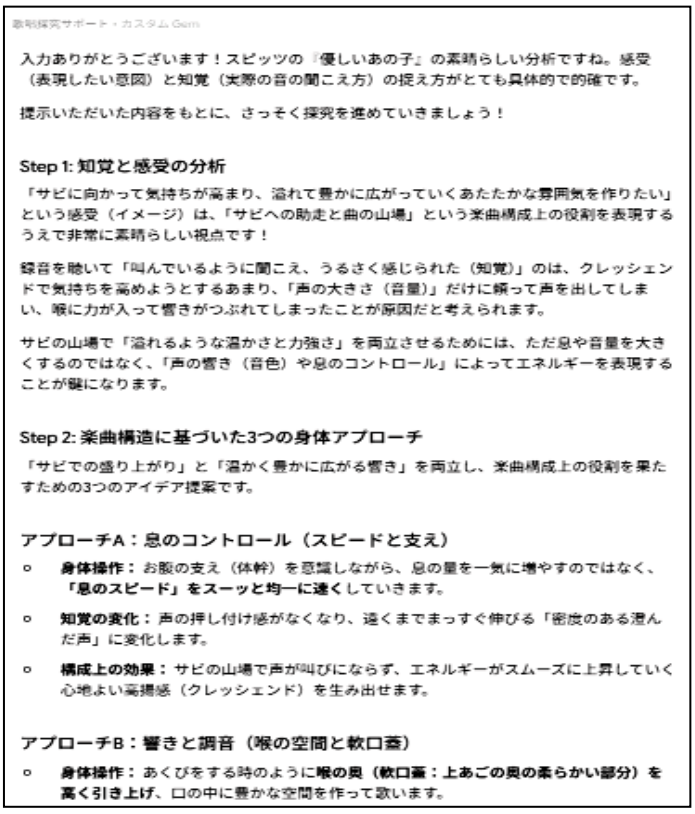
ク　学習の進め方や学習評価の工夫

○　「思考・判断・表現」の指導と評価に関する工夫

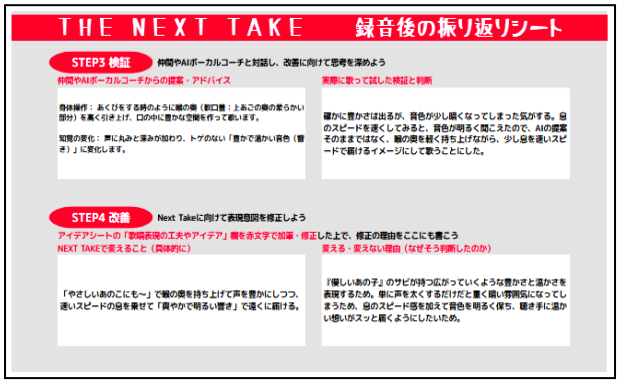
① AI ボーカルコーチの入力側
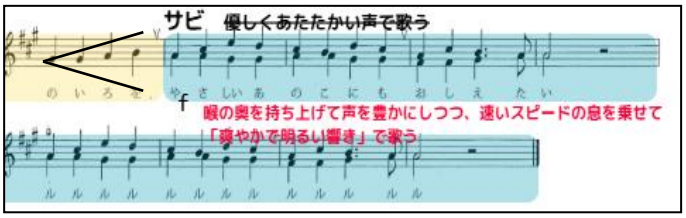


② ①の出力側



③ 振り返りシート



④ 楽譜への記入例



・生徒が自らの表現の効果を吟味・判断し、次回の歌唱に向けた工夫とその根拠を論理的に記述できるよう、ワークシートに「検証」と「改善」の欄を設けて思考のプロセスを可視化したり、録音（Take1）の聴き直しや同じグループの生徒・AI からの提案に対して発声・音色・息使いなどと楽曲構造（曲の世界観や場面の対照等）がどう結び付いているかという視点を与える問いかけを行ったりするとともに、実際に歌いながら表現を比較・検証する時間を確保するなどの工夫が考えられる。本題材では、曲想に合わせた声の出し方を考え、AI の提案や歌唱練習を通して、自分なりの歌い方を自らが判断して決めることを指導と評価の重点としている。（①・②参照）

・生徒の具体的な思考の過程を可視化する手立てとして、楽譜上に当初の計画（黒文字）と検討後の改善案（赤文字）を対比させて、考えの変化や深まりを可視化する「楽曲分析シート」や、最終的な決定理由を順序立てて記述させる振り返りシート（STEP3・STEP4）を活用し、生徒の思考の変容を捉えられるようにする工夫が考えられる。（③・④参照）

○　「思考・判断・表現」の評価の具体例

「おおむね満足できる」状況（B）と判断するポイント	・楽曲の構造と発声・音色・息使いなどを関連付け、それらを知覚・感受し、歌唱しながら試すことや、AI との対話等を通して表現意図を吟味・判断し、目指す歌唱表現の工夫とその理由について楽譜やワークシートにおおむね妥当な内容を書いている。（歌唱、思①） ・歌唱における表現体験や身体感覚の変容を根拠としてアーティストの演奏を鑑賞し楽曲の構造と歌唱表現との関わりについて捉え、演奏の価値や特徴についての批評文におおむね妥当な内容を書いている。（鑑賞、思②）
「十分満足できる」状況（A）と判断する例	・楽曲の構造と発声・音色・息使いなどを適切に関連付けながら、複数の歌唱技法や AI の提案等を吟味して表現意図を判断している。また、具体的な音楽的根拠を挙げながら、目指す歌唱表現の工夫とその理由を具体的かつ詳細に書いている。（歌唱、思①） ・歌唱における表現体験や身体感覚の変容とアーティストの演奏とを適切に関連付けながら、楽曲の構造と表現上の工夫との関係を捉えている。また、具体的な表現の要素を根拠として挙げながら、演奏の価値や特徴についての批評文を具体的かつ詳細に書いている。（鑑賞、思②）
「努力を要する」状況（C）と判断する生徒への働きかけの例	・例えば、楽曲構造の把握はできているが、それを表現するための工夫（発声や息使い等）や活動が停滞している場合には、第１時に分析した楽曲の盛り上がりや場面の対照を再確認させる。さらに、具体的に着目すべきキーワード（「サビでの響きの変化」や「息のスピード」等）を提示し、イメージと表現の工夫とを関連付けられるよう対話を通して助言する。（歌唱、思①） ・自らの演奏の振り返りはできているが、アーティストの演奏に対する批評文作成が停滞している場合には、楽譜の「黒文字（初期案）」から「赤文字（修正案）」への自身の表現意図の変容を振り返らせるとともに、自身の身体感覚の変化と楽曲構造との関わりを意識させ、批評の観点を整理できるよう対話を通して支援する。（鑑賞、思②）

(2) 美術Ⅰの計画例

ア　題材名

「切り絵ｄｅブックカバー」

イ　内容のまとまり

「Ａ表現」(2)デザイン、「Ｂ鑑賞」(1)鑑賞及び〔共通事項〕(1)

ウ　使用教材

教科書、原画用ワークシートLink①、黒色画用紙（八つ切り半切サイズ）、鉛筆（４Ｂ、２Ｂ、ＨＢ、Ｈ）、デザインナイフ、マスキングテープ、クリアファイル、カッターマット、クラフト紙

エ　題材の目標

○　「知識及び技能」に関する題材の目標

・切り絵特有の図と地のコントラストや､材料の質感がもたらす造形の要素の働き、知的財産権を理解する。（〔共通事項〕(1)ア）

・デザインナイフなどの用具を安全に扱い、意図に応じた形を切り抜く基礎的な技能を身に付ける。（「Ａ表現」(2)デザイン　イ(ｱ)）

○　「思考力、判断力、表現力等」に関する題材の目標

・地域を見つめ直すことで主体的に主題を生成し、それを伝えるための効果的な構成を練る。（「Ａ表現」(2)デザイン　ア(ｱ)）

・ブックカバーとしての機能（保護・装飾・伝達）や、「本を保護する」、「地域を伝える」といったデザインの目的・条件、新書と文庫の違いによる見え方の違い、造形

的な美しさとの調和について考え、創造的な表現の構想を練る。（「A表現」(2)デザイン　ア(ｲ)）

・日本特有の文様表現を感じ取り、切り絵の見方や感じ方を深める。（「B鑑賞」(1)鑑賞　(ｲ)）

○　「学びに向かう力、人間性等」に関する題材の目標

・地域の価値を主体的に発見し、よりよい表現を目指して切り絵の工程やデザインの構成を試行錯誤しながら、粘り強く工夫改善に取り組もうとする。

・自己や他者の表現を尊重し、批評し合う活動を通して、自らの学習を調整しようとする。

オ　題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知 切り絵特有の図と地のコントラストや、材料の質感がもたらす造形の要素の働き、知的財産権を理解している。 技 デザインナイフなどの用具を安全に扱い、意図に応じた形を切り抜く基礎的な技能を身に付けている。	発 地域を見つめ直すことで主体的に主題を生成し、それを伝えるための効果的な構成を練っている。 発 ブックカバーとしての機能や、「本を保護する」、「地域を伝える」といったデザインの目的や条件、造形的な美しさとの調和について考え、創造的な表現の構想を練っている。 鑑 日本特有の文様表現を感じ取り、切り絵の見方や感じ方を深めている。	態表 地域の価値を主体的に発見し、よりよい表現を目指して切り絵の工程やデザインの構成を試行錯誤しながら、粘り強く工夫改善に取り組もうとしている。 態鑑 自他の表現を尊重し、批評し合う活動を通して、自らの学習を調整しようとしている。

カ　指導と評価の計画（24時間）

次 【時間】	学びの過程	ねらい（「○」）、学習活動（「・」） （学習活動の概要、指導上の留意点）	重点	記録	備考 （「おおむね満足できる」状況（B））
第一次 【2時間】	習得	○　ブックカバーの機能や切り絵の特徴など、造形の要素の働きについて理解している。 ・発想法とデザインの学習 ・過去の作品鑑賞 ・知的財産権保護の学習	知	○	ブックカバーの機能や切り絵特有の図と地のコントラストについて理解している。
第二次 【10時間】 本時は 6時間目	活用	○　目的や条件を踏まえ、造形的な美しさとの調和を考えデザインの構想を練っている。 ・資料収集とアイデアスケッチ ・イメージの検証（ICT活用） ・原画の作成 ・プレゼンテーション（相互鑑賞）	思		ブックカバーとしての機能や、地域の価値を主体的に考察し、よりよい表現を目指して切り絵の工程や構成を試行錯誤しながら工夫改善しようと取り組んでいる。 デザインの目的や条件と、造形的な美しさとの調和について考え、構想を練っている。
第三次 【10時間】	活用	○　原画を基に切り絵の作業を行う。 ・切り抜き方法の学習と制作 ・切り抜き原画の提出・貼付 ・プレゼンテーション（鑑賞交流）	技		用具を安全に扱い、意図に応じた形を切り抜く基礎的な技能を身に付けている。

第四次 【2時間】	探究	○　鑑賞活動を通して、造形の要素や全体の印象について見方や感じ方を深めている。 ・作品展示交流（作品鑑賞） ・ブックカバー配布 ・感想の収集と共有（ICT 活用）	思	○	他者のよさに気づき認め合い、造形の要素や全体の印象について、見方や感じ方を深めている。

キ　学習指導案（8時間目／24 時間中）

本時の目標

生成 AI を活用することで、デザインの目的や造形的な美しさとの調和を図るための課題を見出し、デザインの構想を深めることができる。

本時の授業展開　A：Aとなる生徒の姿、B：おおむね満足できる生徒の姿、C：Cへの具体的な手立て

学習の段階	生徒の活動	教師による支援のポイント
導入 （5分）	○　本時の学習内容を確認し、交流前に自分の原画のねらいと工夫点を確認する。	・一人一人が言語活動に参加できるよう、生徒を4名程度のグループに分ける。
展開1 (10分)	○　原画の相互鑑賞（グループ） ・各作品のねらいとよさ、課題を共有する。	・目標に照らしたねらいになっているか、また切り絵やブックカバーにそぐわない課題がないかについて、問いかける。
展開2 (15分)	○　生成 AI による加工（グループ） ・原画を撮影し、生成 AI に画像を読み込ませる。 ・課題となる点を修正するためのプロンプトを入力する。 ・生成したものを相互評価により、新たな課題を発見し共有する。	・「プロンプトの活用例」を提示する。 ・課題の解決に文様を活用する方法があることを再確認する。 ・改善された点や新たな課題について、作品のねらいに沿って整理するよう促す。

鑑　鑑賞ポートフォリオにおける観点別学習状況の判断の例

A　Bに加え、言語化し、他者へ伝えることができる。	B　他者のよさに気付き認め合い、造形要素や全体の印象を創造的に味わっている。	C　共通点や相違点など例を示し、気付きを与える。

態鑑　鑑賞ポートフォリオでの交流中の生徒の様子における観点別学習状況の判断の例

A　Bに加え、他者のよさを言語化して認め批評し、自らの学習変容に役立てている。	B　自己や他者の表現（原画やプレゼンテーション）を尊重し、批評し合う活動を通して、自らの学習を調整しようとしている。	C　自他の共通点について例を挙げて説明し、相違点を出しやすくする。

整理 (15分)	○　原画の修正（個別） ・共有した課題を基に、造形的な美しさとの調和を崩さず、原画を修正する。	・原画のねらいを見失っていないかに留意させる。

発　制作ポートフォリオでの交流中の生徒の様子における観点別学習状況の判断の例

A　Bに加え、目的のために単純化、強調化した配置を効果的に構成できている。	B　ブックカバーとしての機能（保護・装飾・伝達）や、「地域を伝える」といったデザインの目的や条件、新書と文庫の違いによる見え方の違い、造形的な美しさとの調和について考え、創造的な表現の構想を練っている。	C　制作例を用いて、言葉を替えて説明するとともに、個別に目的や条件を確認する。

まとめ （5分）	○　本時の振り返り（鑑賞ポートフォリオ記入）。	・生成 AI により解決した点と、新たに生じた課題や問いを記述するように促し、次時の取組につなげるよう留意する。

態表　制作ポートフォリオにおける観点別学習状況の判断の例

A　Bに加え、様々な考え方を練り出し、受け入れ、粘り強く工夫し続けている。	B　地域の価値を主体的に発見しようとし、よりよい表現を目指して切り絵の工程やデザインの構成を試行錯誤し、粘り強く工夫改善しようとしている。	C　他の生徒の取組を言語化して伝えた上で取り組むべきことを示し、気付きを与える。

※評価材料

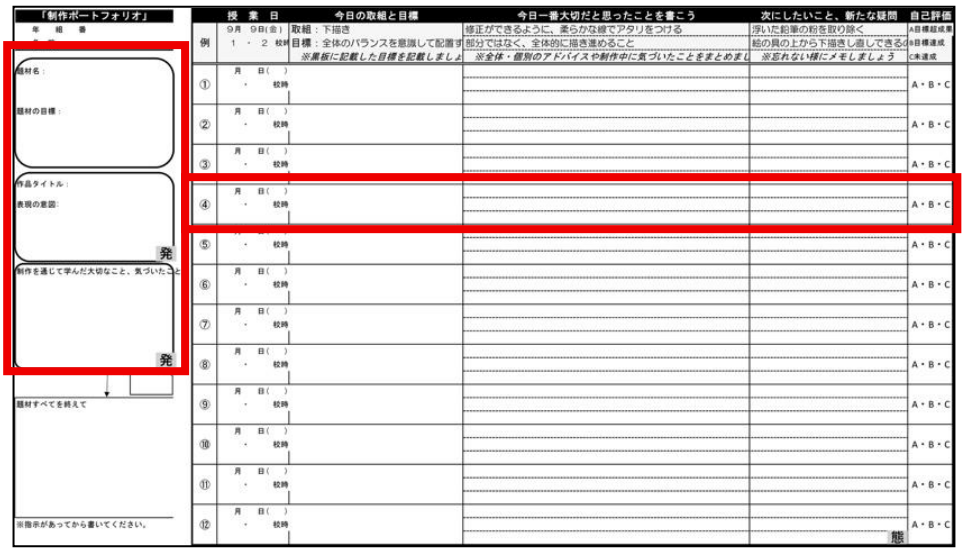


図３：制作ポートフォリオ…制作に係る記録や目標と制作の意図等を記入するためのワークシート

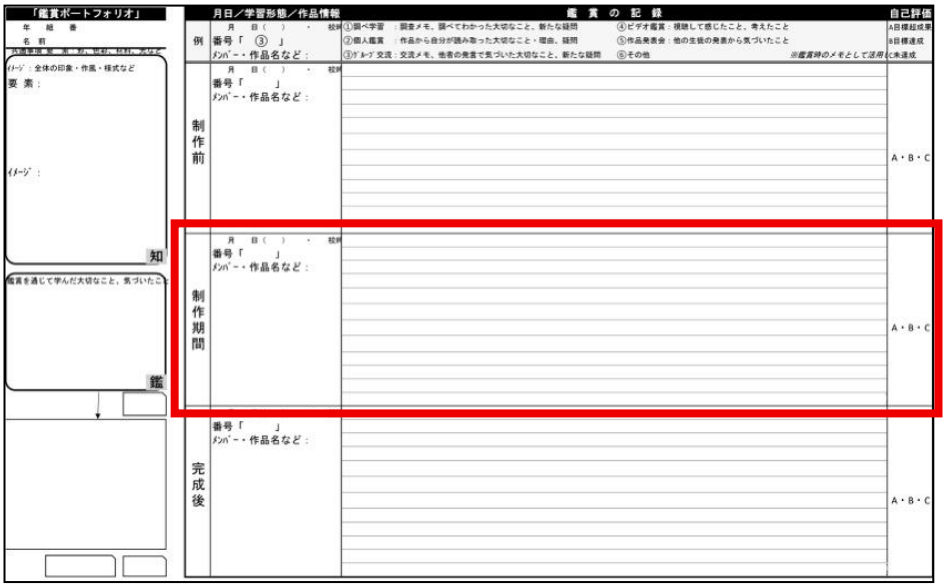


図４：鑑賞ポートフォリオLink②…鑑賞に係る記録（鑑賞メモ）や鑑賞の振り返り等を記入するためのワークシート

ク　学習の進め方や学習評価の工夫

(ｱ) 造形的な視点と作品の様式や全体の印象としての視点

本題材は、切り絵の技術や文様の活用という視点と、ブックカバーの様式というより大きな視点から見ることができる。生徒が豊かな鑑賞体験をするには、作品の部分を造形要素として見ることに加え、作品から離れてみたり本に巻いてみたりするなどの全体の様式的な見方も欠かせない。鑑賞の場面では、生徒にこれら二つの視点を示し、相互交流させながら見方を共有させることで、作品の部分と全体の関係についての視点を根拠に対話することが促される。表現による実体験が二つの視点と対話により整理・言語化されることで、生徒一人一人が鑑賞の能力を高め、自然な形の表現に生かされると考えられる。

(イ) ICT 及び生成 AI の活用について

生成 AI は、学習データの影響により、既存作品に類似した表現を生成する可能性がある。そのため、創作活動においては、生徒自身が時間をかけて制作したアイデアスケッチを中心に、生成 AI を「改善のための支援ツール」として活用することが重要である。生徒自身が構図や表現の意図を決定し、生成結果を比較・検討しながら主体的に取捨選択することで、創作の主体性が担保される。このような活用方法は著作権への配慮と創造性の育成の両面から教育的意義が大きい。

【生成 AI 活用の流れ】

<table>
<tr><td>1</td><td>アイデアスケッチを生成 AI に取り込み、デザイン案を作成する。

プロンプトの例１
○　役割
　切り絵特有の「つながり」と「余白の美しさ」を理解し、実際に制作可能なデザインを提案してください。
○　目的
　添付したアイデアスケッチを基に、切り絵によるブックカバー用デザインを制作する。原画の構成や世界観を尊重しながら、視認性・造形性・デザイン性を向上させること。
○　条件
・原画の構図やモチーフを生かしながら完成度を高めること。
・タイトルや文字は一切入れないこと。
・白黒のみで表現すること。
・全ての線・面は１枚の紙として成立するようにつなげ、孤立したパーツ（浮島）が生じないこと。
・背景には青海波などの規則性のある伝統文様を配置すること。
・B4 サイズ以内に収まる構図とし、裁ち落としや余白も考慮すること。

▲アイデアスケッチ</td></tr>
<tr><td>2</td><td>よい点と悪い点に分けて、生成 AI に客観的意見を求める。

プロンプトの例２
＃　生成したデザインについて、①デザイン性、②切り絵としての完成度、③ブックカバーとしての機能性、④オリジナリティの４つの観点から評価してください。
＃　よい点と改善点を具体的に指摘し、改善案も提案してください。
＃　実際に切り絵として制作可能か確認してください。
＃　既存作品との類似性や著作権上の懸念があれば、併せて指摘してください。

出力例
よい点
・シルエットが強い。
・白黒の面積比がよい。
・全体がつながっている。等
改善点
・背景（青海波）が主役と競合している。
・右側の植物が少し混雑している。
・ブックカバーとしては余白が少ない。
・中央が弱い。
・外周の円が弱い。等　（以下省略）

▲生成された画像</td></tr>
<tr><td>3</td><td>生成 AI の指摘した点を、一つの客観的な意見としてアイデアスケッチの参考にし、構想を継続する。</td></tr>
</table>

(3) 書道Ⅰの計画例

ア　単元名

「古典を纏う―王羲之、顔真卿に学ぶ行書表現―」

イ　内容のまとまり

「Ａ表現」(2)漢字の書及び〔共通事項〕(1)

「Ｂ鑑賞」(1)鑑賞及び〔共通事項〕(1)

ウ　単元の目標

○　知識及び技能

・書体や書風と用筆・運筆との関わりについて理解する。(「Ａ表現」(2)イ(ｲ))

・線質、字形、構成等の要素と表現効果や風趣との関わりについて理解する。(「Ｂ鑑賞」(1)イ(ｱ))

・古典の線質、字形や構成を生かした表現の技能を身に付ける。(「Ａ表現」(2)ウ(ｲ))

○　思考力、判断力、表現力等

・古典の書体や書風に即した用筆・運筆、字形、全体の構成について構想し工夫する。(「Ａ表現」(2)ア(ｱ))

・生活や社会における書の効用について考え、書のよさや美しさを味わって捉える。(「Ｂ鑑賞」(1)ア(ｲ))

○　学びに向かう力、人間性等

・行書に関心をもち、主体的に漢字の書の幅広い表現の活動に取り組み、書に対する感性を豊かにし、書を愛好する心情を養う。

・行書のよさや美しさを感受し、生活や社会における書の効用について考えながら、主体的に漢字の書の幅広い鑑賞の活動に取り組み、書に対する感性を豊かにし、書を愛好する心情を養う。

エ　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
〔共通事項〕 用筆・運筆から生み出される書の表現性とその表現効果との関わりについて理解している。 ・書体や書風と用筆・運筆との関わりについて理解している。 ・線質、字形、構成等の要素と表現効果や風趣との関わりについて理解している。 ・古典の線質、字形や構成を生かした表現の技能を身に付けている。	・古典の書体や書風に即した用筆・運筆、字形、全体の構成について構想し工夫している。	・行書に関心をもち、主体的に漢字の書の幅広い表現の活動に取り組もうとしている。 ・行書のよさや美しさを感受し、主体的に幅広い鑑賞の活動に取り組もうとしている。

オ　指導と評価の計画（10 時間）　　Bとなる生徒の姿の例

次 【時間】	学びの過程	ねらい、学習活動等	評価の観点 ◎指導に生かす評価 ●記録に残す評価 知	思	態
第一次 【２時間】	習得	○　行書の特徴や社会における効用について考える。 ・生活の書を踏まえ、行書のよさや、書と社会との結び付きについて考える。 ・双鉤塡墨を通して行書の点画、用筆・運筆の特徴を確認する。	◎		
第二次 【１時間】	習得	○　蘭亭序と祭姪稿を鑑賞する。 ・第一印象をグループで交流する。 ・作品が書かれた背景や作者の心情及び運筆、表現の特徴について比較しながら確認する。	◎		
第三次 【２時間】	活用 習得	○　蘭亭序を臨書する。 ・生成 AI を活用する際の留意点について確認する。 ・蘭亭序の用筆・運筆、字形の特徴について理解し、表現する。 ・相互の作品を鑑賞する。 カスタム生成 AI(Gem)の活用		◎	
第四次 【２時間】	活用 習得	○　祭姪稿を臨書する。 ・祭姪稿の用筆・運筆、字形の特徴について理解し、表現する。 ・相互の作品を鑑賞する。 カスタム生成 AI(Gem)の活用		◎	
第五次 【２時間】 （本時）	活用・探究	○　自分が選んだ語句を創作する。 ・蘭亭序又は祭姪稿の用筆・運筆、字形に基づいた表現を探究する。 カスタム生成 AI(Gem)の活用 【知】 創作を通して蘭亭序(又は祭姪稿)の書風と用筆・運筆との関わりについて理解している。 【技】 臨書の学習を通して身に付けた蘭亭序(又は祭姪稿)の線質、字形や構成の技能を生かし、自身の表現意図に基づいて表現している。 蘭亭序(又は祭姪稿)の書体や書風に即した用筆・運筆、字形、全体の構成について構想し工夫するとともに、自身の考えを適切に言語化している。 自身の意図、構想に基づく表現をするために、表現を工夫して効果的に表すことに粘り強く主体的に取り組もうとしている。	◎	●	◎
第六次 【１時間】	活用・探究	○　創作作品について相互の作品を鑑賞する。 ○　単元を振り返る。 鑑賞活動を通して、作品のよさを実感をもって感受し、生活や社会における行書の効用について考え、書のよさや美しさを味わって捉えているとともに、自身の考えを適切に言語化している。 獲得した知識を生かして鑑賞活動に取り組み、行書のよさや美しさを感受し、行書の価値について粘り強く主体的に考えようとしている。		◎	●

カ　学習指導案(８、９時間目／10時間中)

<table>
<tr><td colspan="6">学習課題：自分が選んだ語句を創作する。</td></tr>
<tr><td colspan="6">本時の目標：臨書の学習を通して身に付けた蘭亭序(又は祭姪稿)の線質、字形や構成の技能を生かし、自身の表現意図に基づいて表現を探究する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">過程</td><td rowspan="2">時間</td><td rowspan="2">学習活動等</td><td rowspan="2">指導上の留意点</td><td colspan="3">評価の方法
◎指導に生かす評価
●記録に残す評価</td></tr>
<tr><td>知</td><td>思</td><td>態</td></tr>
<tr><td>準備・導入</td><td>10分</td><td>【前時までの振り返り】
・蘭亭序、祭姪稿が書かれた背景、筆者の心情や用筆・運筆、字形の特徴について振り返る。
【本時の確認】
・自分が選んだ語句を「蘭亭序」（又は祭姪稿）の書風で創作することを確認する。</td><td>・各自の Google スライド(ポートフォリオ)に記録された作品や学びの過程を基にこれまでの学習を振り返らせる。</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>展開</td><td>30分

40分</td><td>【作品構想、試作】
・制作する語句を選定し、どちらの古典の書風が適しているかを考える。
・書法字典アプリケーションを活用して草稿を作る。
・作品のどの部分に「蘭亭序」(又は祭姪稿)の要素を入れるかについて具体的に考え、試作する。

【意見交換、構想・工夫の見直し】
・他者の意見や生成 AI のフィードバックを基に作品の構想・工夫を見直す。

【作品の完成(清書)】
・自身の作品を制作する。</td><td>・どちらの古典を基にするかについては、選定した語句の字形や意味等と古典の書風の特徴との関連を根拠に明確にさせる。

・他者の意見や生成 AI のフィードバックは、多様な意見に触れ、自己の考えを広げ深めるためのものであり、それらを吟味しながら、作品の構想・工夫を見直させる。</td><td>◎
作品</td><td>●
作品制作</td><td>◎
Google スライド</td></tr>
<tr><td>まとめ・片付け</td><td>20分</td><td>【制作の振り返り】
・完成した作品について、「蘭亭序」(又は祭姪稿)の書風を生かして制作できたか、これまでの取組の経緯も踏まえ、自身の表現意図に基づいて制作できたかについて、ポートフォリオに記入しながら振り返る。</td><td>・作品について具体的な根拠をもって振り返らせる。</td><td></td><td>●
Google スライド</td><td>◎
作品</td></tr>
</table>

キ　学習の進め方や学習評価の工夫

(ｱ)　「Ａ表現」における思考・判断・表現

本単元の「Ａ表現」における「思考・判断・表現」の評価の対象となる活動は、「作品制作の過程」である。具体的には、臨書、創作において古典の書体や書風に即した用筆・運筆、字形、全体の構成及び自らの意図に基づいた表現を実現するために、意見交換における他者からの意見や、生成 AI から提示されたフィードバックを吟味しながら自身の作品及び構想・工夫の見直しや深化につなげているか、作品制作の取組状況とワークシート(Google スライド)の記述内容等を見取って評価を行う。

(ｲ)　「Ｂ鑑賞」における思考・判断・表現

本単元の「Ｂ鑑賞」における「思考・判断・表現」の評価の対象となる活動は、「作品鑑賞」及び「単元のまとめ」である。具体的には、古典の鑑賞や他者との作品の共有・相互鑑賞を通して、創造された作品の価値やその根拠について考え、書のよさや美しさを味わって捉えているかを鑑賞活動への取組状況やワークシート(Google スライド)の記述内容等から見取って評価を行う。

○「おおむね満足できる」状況(Ｂ)の例 ◎「十分満足できる」状況(Ａ)の例 ◆「努力を要する」状況(Ｃ)と判断される生徒への手立て	
(ｱ)	○蘭亭序(又は祭姪稿)の書体や書風に即した用筆・運筆、字形、全体の構成について構想し工夫している。 ◎上記に加えて、自身の表現の意図や構想を実現するために、行書の学習を通して獲得した知識や技能を効果的に生かして構想・工夫している。 ◆行書の特質について振り返らせ、作品例を挙げたり範書を示したりしながら、自身の表現の意図、構想に基づいた表現の実現に近付けられるよう対話などを通して支援する。
(ｲ)	○鑑賞活動を通して、作品のよさを実感をもって感受し、生活や社会における行書の効用について考え、書のよさや美しさを味わって捉えている。 ◎上記に加えて、見方・考え方を働かせながら、行書及び古典の価値について生活や社会との関わり、創造された作品や創造することの意味等について、根拠に基づいて実感的に捉え、深く考えている。 ◆自身の取組の経緯を振り返らせ、行書の学習で獲得した知識や技能と関連付けるとともに、生活や社会、あるいは自身の創作における構想・工夫の取組と照らし合わせることで、創造された作品の価値について実感的に捉え、考えることができるよう対話などを通して支援する。

学習の進め方や学習評価の工夫については、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校　芸術(書道)】』p59～63 を参照

４　主体的・対話的で深い学びの実現に向けたチェックリスト

図５は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点として、『学習者』と『授業者』からの視点をまとめたものであり、主体的・対話的で深い学びを実現するために『授業者』が何に取り組めばよいのかを明示的に示したものである。

例えば、『授業者』は「具体物や例を提示して引きつける」ことを通して、『学習者』が「学ぶことに興味や関心をもつ」ことや、『学習者』が「見通しをもつ」ために、『授業者』は「既習事項を振り返る」ことや「生徒が自ら本時の目標をつかむようにする」ことなどの視点が必要であると考えられる。

このように、図５における視点については、主体的・対話的で深い学びを実現するために、『学習者』と『授業者』の視点のどちらか片方が重要というのではなく、双方の視点の往還を通して実現していくことが重要である。

	授業改善に向けた『学習者』の視点	授業改善に向けた『授業者』の視点
主体的な学び	□学ぶことに興味や関心を持つ □自己のキャリア形成の方向性と関連付ける □見通しをもつ □粘り強く取り組む □自己の学習活動を振り返って次につなげる	□既習事項を振り返る □演奏や作品等を提示して引きつける □生徒が明らかにしたくなる学習課題を設定する □生徒が自ら本時の目標をつかむようにする □学習課題を解決する方向性について見通しを持たせる □生徒が自分の考えを持つようにする □生徒の思考を見守る □生徒の思考に即した授業展開を考える □生徒の考えを生かしてまとめる □その日の学びを振り返る □新たな学びに目を向けさせる
対話的な学び	□生徒同士の協働を通じ、自己の考えを広げ深める □教職員との対話を通じ、自己の考えを広げ深める □地域の人など多様な他者との対話やICT等の活用を通じ、自己の考えを広げ深める □先哲の考え方を手掛かりに考える	□思考を交流させる □交流を通じて思考を広げる □協働して問題解決する □板書や発問で教師が生徒の学びを引き出す □ICTや生成AI等を活用して、多様な意見に触れさせる
深い学び	□芸術に関する各科目の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる □知識を相互に関連付けてより深く理解する □情報を精査して考えを形成する □問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう	□資質・能力を焦点化する （身に付けさせたい力を明確にする） □単元・題材や各授業の目標を把握する □ねらいを達成した生徒の姿を具現化する □教材の価値を把握する □単元・題材及び各時間の計画を立てる □目標の達成状況を評価する

図５　主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について（令和２年６月文部科学省　国立教育政策研究所）を基に一部作成